

# 『うつほ物語』「内侍のかみ」巻におけるあて宮の人間化

——「高麗」が切り拓く異世界を発端として——

## The humanization of Atemiya in the “Naishi no Kami” chapter of The Tale of the Hollow Tree: Starting with Another world pioneered by “Goryeo”

黄 睿 琦\*

HUANG Ruiqi

(要旨)

『うつほ物語』の女主人公であるあて宮の人物造形は、従来、『竹取物語』のかぐや姫に重ねられる傾向にあった。それゆえ、東宮への入内によってもたらされた彼女の変貌についても、「天人（かぐや姫）」から「東宮妃（未来の母后）」への変貌として捉えられている。あるいはまた、「人形」（非-人間）から「人間」へという解釈も提示されている。しかし、従来指摘されているあて宮の変貌は政治的な論理におけるものであり、すなわち、彼女が父である正頼の構想する政治戦略を実践していくものとしてある。論者は、これは彼女が真の意味で人間的な変貌を遂げたとは言えないと考えている。

本稿では、あて宮の人間化してゆく契機を、「内侍のかみ」巻の言語状況中に見出せることを論じる。具体的には、「高麗」という表現が切り拓く異国（言説上の異世界）において、あて宮が、東宮妃という社会的な身分秩序から解放されること。その際、彼女が一人の女性として仲忠と恋歌を交わし、精神的な恋愛ゲームを楽しむこと。その後、あて宮に恋愛感情が芽生えることで、徐々に夫である東宮に対し、男性としての不満を感じ始め、より人間的な存在として成長していくこと、などについて論じる。

### 一、問題提起と先行研究

長編物語作品である『うつほ物語』は、「俊蔭」巻と「藤原の君」巻という二つの発端の巻を持つことで、従来、「天人から伝授された琴の秘技によって栄える俊蔭家の物語」と、「あて宮をめぐる求婚譚や東宮入内という王権を獲得する正頼家の物語」という二つの系統に分けられると指摘されている<sup>1</sup>。こういった『うつほ物語』の二つの主題のもとで、あて宮は、俊蔭の孫である男主人公の仲

忠と並列して、女主人公として重要な役割を果たしている。あて宮の人生の歩みから物語の筋を確認した場合、次のようになる。幼少の頃より、あて宮は「変化のもの」「天女の下りて生みたまへるなり」（藤原の君・133頁）<sup>2</sup>と噂される絶世の美貌によって、名が知れわたっている。その為に、数え切れない求婚者が群がる。結局、彼女は父親である正頼の意志に従い、東宮に入内して「藤壺」と呼ばれる妃となった。これにより、仲忠をはじめとする多くの求婚者たちを落胆させたので

\* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程（The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University）

ある。後に、東宮（今上帝）の寵愛を一身に集める藤壺は、立坊争い（藤壺腹の第一皇子と兼雅の娘梨壺腹の第三皇子の立坊をめぐる争い）において、第一皇子を次期の坊に据えるために、参内拒否によって東宮（今上帝）に圧力をかける一方で、実忠の中納言昇進にも配慮し、正頼家の権力獲得のために政治力を発揮している。最終的には、世間の人々は梨壺腹皇子の立坊を確信するが、東宮の寵愛によって、藤壺は勝利を収めた。

あて宮は、物語の展開に重要な役割を担うため、従来、様々な角度から論じられてきた。特に、あて宮の人物造形については、「求婚譚」「変化のもの」「天女」といった要素によって、『竹取物語』のかぐや姫に重ねられる傾向にあった<sup>3</sup>。したがって、その部分のあて宮は、かぐや姫の「天人」或いは「変化のもの」という性格を構造として帯びることとなり、非-人間的な位相に据えられると解されている。しかし、そのようなあて宮は、東宮への入内によって、求婚譚の構造から離脱することになる。

従来、あて宮の変貌については、東宮への入内によって、あて宮がかぐや姫の造型から分離し、政治（後宮政策）の論理に組み込まれるようになるという方向から論議されてきた。例えば、須見明代は、あて宮が『竹取物語』の求婚譚を担い、「地上的論理に従って愛と権力の問題、すなわち求婚譚から政治抗争までに発展していった」と指摘する<sup>4</sup>。また、室城秀之は、あて宮の個性について、「あて宮は、天に帰って行ったかぐや姫とは異なり、流離ともいべき宮中での生活のなかで、確実に変貌している。物語前半の求婚譚を通して、ほとんど個性的に描かれることのなかったあて宮が、個性的に輝いている」とする<sup>5</sup>。更に、大井田晴彦は、あて宮の変貌を「人間化」として位置づけ、「藤壺がか

つての冷たい人形のような造型から脱却し、血の通った人間へと変貌している」とし、「国母たるにふさわしい人間性と威厳を備えて来た」と説く<sup>6</sup>。なお、湯浅幸代は、この位置づけを踏襲し、国母たるべき素質を表しているあて宮は、「人間化した『かぐや姫』のごとき情愛が窺える」とする<sup>7</sup>。つまり、先行研究では、東宮への入内によってもたらされた彼女の変貌については、「天人（かぐや姫）」から「東宮妃（未来の母后）」への変貌として捉えられてきたのである。この変貌はまた、「人形」（非-人間）から「人間」へと解されてもいる。

ただし、こういった先行研究における「人間化」するあて宮という把握は、あて宮が個性や人間性を持つ人物へと変貌したという意味ではない点に注意しておきたい。結婚し、出産するという経験は、確かにかぐや姫（天人）とは異なり、人間的であると言える。ところが、入内し、東宮妃から母后（未来の国母）へという道筋は、父正頼の構想する政治戦略を実践していくものとしてある。それは、あて宮が自ら望んだ人生とは言えないと考えられる。したがって、あて宮の場合、それらのプロセスは政治戦略の構造に組み込まれたものとして機能していると言える。そのように考えた場合、求婚譚の折から始終、父である正頼の後宮政策の持ち駒として利用されていたあて宮は、まだ人形のような状態に置かれている。したがって、そのようなあて宮は、真の意味で「人間化」したとは言えない。

以上のような見取り図のもとに、本稿は視点を変え、立坊争いをめぐる「国譲」巻にこだわることなく、あて宮の人間化してゆく契機を「内侍のかみ」巻の言語状況（ことばの祭り<sup>8</sup>）中に見出せることを論じたい。「内侍のかみ」巻において、祭りの雰囲気と非日常

的な要素が色濃く描かれている中で、複数の対話場面が記述されている。会話文は、物語の進行やキャラクターの発展だけでなく、祝祭の時空を形作る役割を果たす要素であり<sup>9</sup>、その中には発話者の表面的な意味と内面的な意味という二重性が含まれている<sup>10</sup>。この事を踏まえ、本稿では「高麗」をめぐるあて宮と仲忠のやり取りに着目する。具体的には、「高麗」という表現が切り拓く異国（言説上の異世界）において、あて宮が、東宮妃という社会的な身分秩序から解放されていくこと。その際、彼女が一人の女性として仲忠と恋歌を交わし、精神的な恋愛ゲームを楽しむこと。その後、あて宮が恋愛感情というものを持ち始め、徐々に夫である東宮に対して、男性としての不満や不適切さを感じ始め、より人間的な存在として成長していくこと、などについて論じる。

## 二、社会的な役割から解放される契機—高麗（独楽）

求婚譚におけるあて宮は、基本的に求婚者の全員に対して「つれなき」態度を貫いている。それゆえ、彼女は「ものの心も知らぬ」（国譲 上・128頁）女性として描かれており、そのような造形について、従来、「個性的」ではなく、「人形」のような存在だと指摘されてきた。あて宮の人物像については、後世の『源氏物語』も紫の上の口を借りて、次のように評している。

上、「うつほの藤原の君のむすめこそ、いと重りかにはかばかしき人にて、過ちなかめれど、すくよかに言ひ出でたる、しわざも女しきところなかめるぞ、一やうなめる<sup>11</sup>。 （蛭・215頁）

求婚譚において、あて宮は誰に対しても一様な態度を見せるが、仲忠のみを「こともなき」（春日詣・281頁）男性と見なし、彼に好感を抱いている。しかし、その好感が恋愛感情には至っていない。同時に、正頼はあて宮の東宮入内を画策している。あて宮は入内を望まないものの、最終的には父の意向に従い、東宮妃となる。その後、入内したあて宮は「源氏女」としての役割を果たし、東宮と良好な夫婦関係を築き、皇子を次々と産むことになる。「あて宮」巻は、正頼家の益々の繁栄や東宮妃としてのあて宮の幸福を描いて終焉を迎える。

続いて展開するのは、現実的な価値の逆転をもくろむ「内侍のかみ」巻という、非日常的で祭りの雰囲気溢れる一卷<sup>12</sup>である。この巻において、あて宮と東宮との日常的な夫婦関係が希薄化するとともに、あて宮と仲忠の禁忌的な関係が表面化してくることになる。「内侍のかみ」巻は、朱雀帝と仁寿殿女御との会話から始まる。その会話文中には、仲忠とあて宮をはじめとする兼雅と仁寿殿女御、兵部卿の宮と承香殿の女御など、反秩序的な関係が複数見られる。以下に仲忠とあて宮に関する部分を見ていく。

（朱雀）「そが中になむ、いとせちにいふ人々ありと聞きしかど、仲忠は天下にめづらしき心あらむ女も、あれだに少し気色あらばえ忍ぶまじき人ぞかし。それをいかによそに見ては、いかにあらむと思ふなむ、いと憎くありがたき御心といよいよ思ほゆる。今もなほその心失すまじかし」。御いらへ、「さるは、かのあてこそ、見るところやありけむ、異人よりは返りごとせまうくは思ひたらざりしを、かの仲忠もさもや見けむ、いとあはれと思ひぬべきこと多くすめりしかど、

まめやかに思はでやみぬめりきや」。

(内侍のかみ・162-163頁)

朱雀帝が、長い間、あて宮に対する仲忠の変わらぬ志について感嘆する。朱雀帝の発言を受けて、仁寿殿女御は、あて宮にとって仲忠が特別な存在だと認め、二人が結ばれなかったことを残念に思っている。このような非日常的な色好みの雰囲気が続く中で、あて宮と仲忠のやり取りに関する文脈が展開している。

御簾、御几帳の中に隠れて、長押に押しかかり、ただあて宮の御前に候ひて、ものなど聞こえて、(仲忠)「今日上に参上りたまはぬ人は、いと罪深き心地こそしたまへ。さるめでたきことのありがたげなるを御覧ぜで。なほおぼろけにはあらかし」。上、兵衛の君して、いらへなどせさせたまふ。「それ見過ぐすも、罪なきにはあらずかし」。…中略…かくて、もの聞こえたまひ、よろづのことをいひ居たれば、上、兵衛していらへさせたまふ。中將、「**高麗人**などこそ通辞はありといふなれ、まかり渡るとも思はぬに、あやしくもあるかな」。いらへ、「されども、**独楽**はた遊ばず、上手におはしませばにこそはあれ」などいふ折に、夕暮れになりぬ。秋風いと涼しく吹く。

(内侍のかみ・209-211頁)

これは、「内侍のかみ」巻において描かれる仲忠とあて宮の会話の場面である。仲忠の話している相手は、言伝を担当するあて宮付きの女房の兵衛の君である。これより前段の文脈では、朱雀帝と仲忠が賭け碁をする場面が展開し、そこでは仲忠が負けていた。勝った朱雀帝は弾琴を要求したが、仲忠はそれを

断り、あて宮の局である藤壺に逃げ隠れた。藤壺で、仲忠は今日の節会の盛儀をめぐって、あて宮と雑談をはじめた。次第に、仲忠は言伝を通じて、あて宮と会話することに不満を感じ、「高麗」についての話題を引き出し、直接対話を望む。かくして、後段の文脈では、仲忠が、兵衛の君を通じて、あて宮と比喩の激しい応酬を繰り返し、ようやく、あて宮が言伝なしに仲忠と直接的に歌を交わすことに至る。

ここで、あて宮と直接対話を望んでいる仲忠は、「高麗人は通訳が必要だということだが、私は外国に渡った覚えもないのに、変ですわね、ここは高麗でしたっけ?」と述べている。つまり、仲忠は、自らが高麗に渡ってきて、高麗人を相手にする日本人であるかのように扱われた(通訳のような役割を果たす取次の女房を通じてあて宮と会話する)ことに不満を抱き、あて宮に皮肉を言ったのである。注目したいのは、兵衛の君があて宮の意を汲んで、「あて宮様は独楽を上手に回します(あて宮は並々ならぬ独楽(高麗)人である<sup>13)</sup>。」と当意即妙に切り返したというところである。先行研究によると、この『うつほ物語』に登場する「高麗人」は渤海使<sup>14)</sup>となる。平安時代において、鴻臚館という外交施設で遇されていた渤海国の使節(高麗人)は、日本人にとって外部性を有する異人であったと言える。つまり、高麗(渤海国)は、日本にとって、異なる価値観を有する異国とも言える。この会話によって、この時点で、「高麗人」(独楽人)に擬されるあて宮と、藤壺の局を「高麗」であると疑う仲忠とは、共に内裏の宮廷社会から高麗国という異国(言説上の異世界)へと入っていったように解釈されてくるのである。

では、「高麗」という言説上の異世界の持つ意味をどう捉えるべきか。ここでは、物語

の中で構築された物語の経験的現実や社会規範にとらわれなく、独自の価値観を持つ時空として読み取っておきたい。言い換えれば、言伝を通辞になぞらえつつ不満を表明した仲忠の思いは、「高麗」に「独楽」で応じたあて宮の機知によってはぐらかされてしまった。しかし、「高麗（独楽）」の比喩を契機として、二人の応酬は互いの立場（臣下・東宮妃）を越えた激しい恋の駆け引きに発展することとなる。特に、本稿では、「高麗」を、あて宮が一人の女性として人間化してゆく契機として捉えておきたい。

大将、女御の君にもの聞こえたまふ。孫王の君して、御いらへなどいひ継がせたまへば、大将、「今はかく、ありしよりも親しく仕まつるべく侍るを、御通辞なくとも承りなむは」などて、「先つ頃、世の中にあやしきことを申しけるを、卑下せる所に、いかに思うたまひたらむと、聞こしめしけむことをなむ、ここにもかしこにも、限りなく思うたまへ嘆きて、誰も誰もまかり歩きもせで侍りつる。ある所より、かの三条に、とかくのたまはすることなむありける。さる心も思ひ知れとて、かの宮消息にて侍りし、こと定まりて御覽ぜさせむとてなむ、まだ失はで侍る」とて、この君して宮の御文を奉りたまひて、聞こえたまふ。

（国譲 下・339-340頁）

「高麗」という表現の重要性を説明するにあたり、ここでは、もう一つの場面をあげて比較し検討してみる。これは立坊争いが収束した後、仲忠が、後の宮の謀略の記された手紙をあて宮に見せ、自分の誠意を語る場面である。ここで、注目したいのは、「通辞」という表現である。「通辞」という表現は、『う

つほ物語』において、合計三回用いられている。その中で、二回は、仲忠とあて宮とが話し合う場合に使われている。

一回目の場合は、引用した「内侍のかみ」巻における場面に示されたように、「私は外国に渡った覚えもないのに、変ですね、ここは高麗でしたっけ？」という条において、「高麗」という表現を仲忠が用いている。その後、あて宮は、仲忠からのアプローチに対し、切り返したようなポーズを見せつつ、それを契機として利用し、ともに「高麗」という異国（別の時空）に入ってしまった（社会的な役割から一時的に解放される）ということになる。その結果、二人は直接的に会話することが可能となった。二回目のこの場面では、仲忠は、現在東宮大夫に昇進し、以前よりも親しく仕えていると主張し、もう一度、あて宮と社会的な役割（臣下・東宮妃）にとられることなく（通辞なく）、一人の人間として、恋愛の言葉を話し合おうとしている。「国譲」巻の二人のやりとりは、「内侍のかみ」巻の情景を裏返しにしたものと見ることができ<sup>15</sup>。但し、一旦、祭りの幕が降ろされると、「高麗」という社会的な役割から解放される契機を失った二人は、東宮妃や臣下という身分秩序に拘束され、昔のように直接対話によって愛の言葉を交わすことができなくなったのである。

従来、あて宮と仲忠とが「高麗」をめぐる会話を展開する場面について、仲忠の反秩序的な姿勢や個人の立場<sup>16</sup>という点、及び彼のあて宮に対する変わらぬ愛情<sup>17</sup>という点から論じられてきた。本稿では、一人の女性としての立場から、あて宮が社会的な役割から解放される契機になっていると解釈しておきたい。

### 三、歌ことばによって解放された恋愛感情

「高麗」という表現をめぐる会話を皮切りに、あて宮と仲忠の会話の内容は、日常会話から次第に、歌ことばによって構成された恋愛の言葉になっていく。ついに、あて宮は、自ら仲忠と露骨で際どい和歌を交わし始める。次に、二人の和歌応酬の一部を引いておく。

(仲忠)「世の中にわびしきものは、独り住みするにまさるものなかりけり。あが君や、思し知らなむと聞こゆるは、わりなかりけり。今は、<sup>(7)</sup>『結ふ手もたゆく解くる下紐』と聞こえさするも、いとなむかひなき」。あて宮、からうじていらへたまふ。「<sup>(4)</sup> 下紐解くるは朝顔に、とかいふことある」。中將、「同じく吹かば、この風も、ものの要にあたるばかりになりなむ」とて、

「<sup>(7)</sup> 旅人のひもゆふ暮れの秋風は草の枕の露も干さなむ  
涙のかからぬ暁さへなきこそ」。藤壺の御いらへ、

「<sup>(8)</sup> あだ人の枕にかかる白露はあき風にこそ置きまさるらめ  
忘れたまふ人々も、なうはあらじかし」。中將、「まだこそなけれ。

<sup>(9)</sup> 木の葉をも宿にふるさぬ秋風のむなしき名をも空に立つかな  
しるきこともあらじものを。いづれかあだ人ならむ」。藤壺、

「<sup>(10)</sup> 吹き来れば萩の下葉も色づくをむなしき風といかが思はむ  
まめやかにも見えずかし」。 (以下、仲忠二首・あて宮一首の贈答歌)

(内侍のかみ・213-214頁)

仲忠は、まず、一人の男性として、自分のあて宮に対する昔から変わらぬ愛情を吐露する。独身の辛さを訴えつつ、あて宮への愛情を示した後、仲忠は、「下紐」を歌語とする古歌(傍線部ア)を引用することで、あて宮への気持ちを直接的に伝えようとしている。この歌は「思ふとも恋ふとも会はむものなれや結ふ手もたゆく解くる下紐」(古今・恋一 読人しらず)を引くとされる<sup>18</sup>。これは、「下紐」が自然に解けるのは、恋人に会える吉兆だという俗信に基づいて詠まれた歌である。歌には、恋人との出会いを期待しつつも、相手に会えないという歌人の思いが込められている。また、「下紐」は、袴や裳の紐のことで、下紐が解けることは、男女の逢瀬や肉体的な関係を意味することがあり、際どく官能的な表現とされる。

一方で、仲忠の変わらぬ愛情に心を動かされたあて宮は、仲忠が引き出した「高麗」という契機を掴んで、物語の社会秩序が崩れた空間に入っていく。その際、あて宮は、東宮妃という社会的な役割にとられることなく、一人の女性として自ら返歌する。あて宮は、仲忠からの贈歌を受けながら、下紐という歌語を使って、傍線部(イ)のように返歌する。この歌の出典は未詳であり、「我ならで下紐解く朝顔の夕影待たぬ花にはありとも」(伊勢物語・三十七段)を引くとする説もある<sup>19</sup>。これを踏まえた場合、あて宮は、自分の「下紐」はまだ解いておらず、それを解くのは仲忠だと暗に伝えたことになり、あて宮自身もこの恋愛遊戯に入り込んできたと解することができそうである。

歌語の引用によって開かれた恋愛遊戯の文脈を、仲忠は歌の贈答によって伸張しようと試みる。この場面の「夕暮れになりぬ。秋風いと涼しく吹く」(211頁)という現象を、仲

忠は「夕暮れ」と「秋風」という歌ことばに置き換えて、歌の位相であて宮に語り掛けてゆく。仲忠の歌（ウ）を見てみよう。この歌には、直前のあて宮との会話に用いられた「下紐」という歌語を受けて、「紐」の縁として「紐結（ひもゆ）ふ」と続けつつ、そこに「日も夕（暮れ）」というこの場面の状況を重ねる。この時、「夕暮れ」というこの場面をかたどる現象は掛詞の解として歌ことばとなる。と同時に、仲忠もまた、中将という宮廷官人の立場を脱ぎ捨て、「旅人」と化してゆく。すなわち、恋人に会うために藤壺を訪れる旅人として自己を擬えるのである。一方、この歌を受けたあて宮は、仲忠の用いた「秋風」に「飽き」を掛け、自身を「あだ人」（浮気者）に飽きられる女性の位相に転じてゆく。続いて、仲忠は、「木の葉をも宿にふるさぬ」を通じて、自身の潔白と誠実を主張し、自らが「秋風」や「あだ人」と擬えられることに反論する（オの歌）。それに対して、あて宮は、仲忠の来訪を聞いて、興奮した女房たちの様子を「萩の下葉も色づく」という比喩で表現し、「秋風」のような仲忠の多情や色好みは無実ではないと反発する（カの歌）。

以上のように、二人が「下紐」・「秋風」・「あだ人」などが詠み込まれた和歌の交流を行う様子を見てきた。あて宮と仲忠とが歌のやり取りを展開することの意味をどう捉えるべきか。以上の場面について、高橋亨は、次のように述べている。

歌ことばによる表現ゆえに、このような露骨なまでの恋のくどきも可能なのである。歌垣における男女のかけあいの伝統は、王朝貴族たちの祭りの伝統にも生きていた<sup>20</sup>。

また、秋山虔氏も『源氏物語』作中人物の

詠歌をめぐる論考において、歌による交流の機能について次のように述べている。

経験的現実の中での経緯を完全に遮断する和歌の言葉の世界がここに敷設されたのであり、御息所はそこに転位することによって光源氏との間に安定した心の通い路を見出すことができるのである。

(188頁)

歌の詠作は抒情による人間の解放という言葉があるが、その解放とはこれまで述べてきたように日常語とは異質の、ということは思想、感情や意思伝達の具としての言葉ではなく、それ自体が意味であり映像であるような言葉の世界の現実を造営し、そこに転位していくことであろう<sup>21</sup>。

(193頁)

いずれも従うべき見解であろう。歌ことばというものは、日常性から遠い言語形式であり、それ自体は（物語の）日常と現実を遮断し、人間性を解放する機能を有する言語コードでもある。つまり、あて宮と仲忠との歌による応酬は、今までの非一人間的なあて宮にとって、自らの人間性を解放し、一人の女性、あるいは真の意味での人間としての恋愛感情を持ち始める機能を有していると考えられる。言い換えれば、歌による交流を通じて、まず、あて宮と仲忠とが物語の日常や現実から遮断される。次に、二人が心の交流を展開する安定した時空（高麗）が維持される。最後に、あて宮は、仲忠と「ことばの祭り」において、精神的な恋愛ゲームを楽しんだ後、恋愛感情が芽生え、一人の女性として成長してゆく。

#### 四、夫である東宮に対して芽生えた不満

「内侍のかみ」巻が描く「ことばの祭り」の表現の力は、祭りの幕が下りても、時間を超えて持続し、後の巻や物語の展開に対して影響を与え続ける<sup>22</sup>のである。特に、「ことばの祭り」は、一人の女性としてのあて宮にとって、真の意味での人間化してゆく契機を与え、恋愛感情が解放される機能を果たしているとも言える。さて、あて宮に芽生えた繊細な恋愛感情は、東宮と結ばれた夫婦関係に対して、どのような影響を及ぼすか。本節では、あて宮の夫である東宮に対する心情表現を対象として、その具体的な様子を見ていく。

ここで、求婚譚の折や入内した直後の、東宮に対するあて宮の態度を想起しておきたい。求婚譚におけるあて宮は入内を望まないものの、父正頼の意向に従い、東宮と歌を詠みかわしつつ、入内の準備を着実に進めている。更に、入内した直後に、あて宮は東宮と良好な夫婦関係を築いている。以下は、あて宮が、二度目の懐妊を契機として里下がりした翌朝、東宮と交わした一首の歌である。

かくて、あて宮出でさせたまへるつとめて、…中略…

(あて宮)とし月も衣も中には多くとも心ばかりはへだてざらなむ

(あて宮・147-148頁)

あて宮は、東宮との間には年月や衣など、多くの隔りがあるが、心だけは隔てることないよう、里下がりによって寵愛を失う不安を東宮に打ち明けている。注目したいのは、あて宮が、東宮との間に「心を隔てる」ことないように望んでいるところである。つ

まり、この時点で、あて宮が東宮を憎からず思っており、二人の関係も蟬りもなく睦まじいと考えられる。

しかし、「内侍のかみ」巻以後、東宮に対するあて宮の態度が、次第に冷たく変わっていく様子が見られる。「内侍のかみ」巻以後の東宮に対するあて宮の心情表現を調査した結果、あて宮が東宮に対して「むつかる」という感情を頻繁に示していることが明らかになった。「むつかる」という表現は、機嫌を悪くして腹を立てるという意味となる。また、この表現が使われる文脈を辿ってみれば、多くの場合、「仲忠」がそれを引き起こす要因として重要な役割を果たしていることが分かる。以下に、具体的な場面からあて宮の心情を確認していく。

君、「なかなかいとよしや。よに心憎く思ひたる人につきたまひて、一ところ心安く。おのれこそかかるおほたかりに出だし放たれて、よには憂くまがまがしきことを聞き、見たまふ人は殊にはなやかにも見えたまはず。むつかしきまに、目も合はせたまつりたまはずむつつかれば、心よからずとは思されためり。いとこそ用なけれ。里にありしむかしのみ恋しくて、あらしものを。何せむに、かく出だし立てられてあらむと思へば、心憂く悲しきことも多くなむ」。

(蔵開 上・408-409頁)

これは、あて宮が、兄の祐澄に入内によってもたらされた苦痛を訴え、入内する前の里での生活を懐かしむ場面である。他の妃に嫉妬されることで、中傷を受けるあて宮は、他に競う妻もなく、奥ゆかしい仲忠と結婚した女一の宮を羨望の眼差しで見ると見る。本来、東宮(今上帝)の寵妃になることは、貴族女性に

とって最高の榮譽である。それは、最高権力者である帝との結婚によって、自らの地位が向上し、家族の利益や権力も確保されることが期待されるからである。しかし、注目したいのは、あて宮が、東宮（今上帝）が華やかではないために、臣下の仲忠には勝てないと思っていることである。また、あて宮は、男性的な魅力に欠けた東宮に対して、視線を交わすこともせず、不機嫌な様子を示している<sup>23</sup>。本稿では、そこにあて宮の一人の女性としての私的な感情を読み取っておきたい。

（孫王）「むかしながら、今はまして。立ち去りもしたまはでぞ、むつかられおはしますめる。よからぬことの、さまざまに聞こゆるままに、御心もゆかで、まかでて心をだにやらむ、と聞こえたまへど、許したてまつりたまはねば、夜昼ぞむつかりおはします」。

（蔵開 上・440頁）

これは、あて宮付きの女房である孫王の君の発話である。孫王の君が、自らが目撃した東宮とあて宮の夫婦生活について、仲忠に語っている。そこから、東宮が、あて宮の社会的な評判や名声を無視し、ただひたすらあて宮を病的に恋着する様子うかがえる。一方で、あて宮が、東宮の自分に対する異常な執着や、それによって引き起こされた他の妃からの中傷によって、東宮や後宮生活に対して、不快感や嫌悪感を抱いていることが分かる。

（東宮）「この人、むかしの心出し出でたる時か、取りもあへず、ただむつかりにむつかりて、憎みたまひてや。かたち、するわざこそよなからめ。」

（蔵開 上・441頁）

これは、あて宮が東宮と夫婦喧嘩した時、東宮の発話である。東宮は、自分の容姿と才芸が仲忠よりも劣ることを認めている。注目すべき点は、東宮があて宮に嫌われる理由を、あて宮が自分より優れた仲忠をまだ恋慕していると考えていることである。また、あて宮は東宮からの非難に対して直接的な回答を避けた。つまり、あて宮は仲忠への未練を否認していないと解釈できよう。

（あて宮）いとまめやかにむつかり申したまひて、御暇しひて聞こえたまへば、（今上）「はや。いとよかなり」とて、（今上）「出でたまひなば、やがてかしこにものしたまへ。よろづの人の思はむよりは、大将の朝臣の思はむぞ、をかしきや」。

（楼の上 下・571頁）

これは、あて宮が、俊蔭女といぬ宮（仲忠の娘）が十五夜に楼の上ののぼり、琴を演奏することを聞き及び、東宮（今上帝）からは非とも暇を取ろうとする場面である。この前の文脈では、あて宮が、父正頼に宮中へ迎えに来るようにと求める場面が展開し、あて宮が「ここには、まるをかしこに任せて、ただにあらむと思ひはべりしを」（仲忠と結婚していたであろうに）と述べており、仲忠との結婚が叶わなかったことについて、悔しく思っている。そして、引用文では、東宮もまた、仲忠のことが契機となって、あて宮の「むつかる」という心情を導き出したと認めている。

実は、上記の用例のみならず、「かく心を隔てて、心強く悪きは、仲忠の朝臣のするぞ」（蔵開 下・561）や「この大将のことにつきてこそ、度々気色悪しう、苦しけれ」（楼の上 上・459）という東宮の発話から、あ

て宮が品性、容姿や才芸などの点で優れた仲忠を好むため、仲忠に比べ劣ると感じる東宮に不満や嫌悪感を抱いていることがうかがえる。東宮自身も、あて宮が仲忠に対して持つ感情に気づいているようであることが分かる。

但し、あて宮のそのような感情と行為は、東宮妃としては不適切である点には留意しておきたい。というのも、あて宮と東宮との結婚は、正頼家の政治戦略に合致するものだからである。つまり、この結婚は正頼家の権力維持に資するものであり、そのためには東宮との関係を強化し、東宮からの支持を確保する必要がある。それゆえ、あて宮は、東宮に対して穏やかな態度を示し、東宮の信頼や寵愛を固めることが重要である。しかし、実際には、仲忠の話題になると、あて宮が東宮に対して「むつかる」という気持ちを抱く様子が示されている。本稿では、そこにあて宮の一人の女性としての私的な感情が窺える。つまり、あて宮は、終始父正頼の構想する政治戦略を実践していくものとしてあるわけではなく、一人の女性として成長していく（人間化してゆく）存在と言える。そのように考えた場合、本稿では、その不満や嫌悪感を東宮妃としての藤壺の、東宮に対するものではなく、一人の女性としてのあて宮の、男性としての魅力に欠けた夫に対するものとして解釈しておきたい。そもそも、政略結婚では、配偶者との関係は主に政治的な利益や家族の権力維持に焦点を置いている。しかし、あて宮が、恋愛感情を持ち始めるにつれて、より感情的なつながりや相互の理解を求めようになり、その過程で夫との関係において満足感の欠如や感情の不一致が生じることになる。それは、あて宮が、東宮との政略結婚に対して嫌気が差す一因と考えられる。

かくして、「内侍のかみ」巻での「ことば

の祭り」において、仲忠との精神的な恋愛から芽生えるあて宮の恋愛感情は、後の物語の展開において重要な要素となる。本稿では、「内侍のかみ」巻以後、あて宮の東宮に対する「むつかる」という心情表現に着目し、そこにあて宮の一人の女性としての恋愛感情を読み取っておきたい。このような感情の表出は、彼女がより人間的な存在として成長していく過程を示していると考えられる。

## 結論

求婚譚におけるあて宮は、従来、『竹取物語』のかぐや姫の造型に重ねられてきた。したがって、その部分のあて宮は、かぐや姫の「天人」或いは「変化のもの」という性格を構造として帯びることとなり、非-人間的な位相に置かれている。物語の展開に従って、あて宮は父である正頼の政治的な持ち駒として利用され、東宮に入内することになった。後宮での生活を通じて、彼女は将来の国母としての政治的素養を備えるようになった。先行研究では、あて宮の変貌を「非-人間」から「人間」への変貌として捉えている。しかし、あて宮が東宮妃から将来の国母へと歩む道筋は、単に父正頼の構想する政治戦略を実践しているに過ぎない。したがって、これは彼女が真の意味で人間として成長しているとは言えない。

本稿は、立坊争いという政治的な抗争を主題とした「国譲」巻にこだわることなく、あて宮が真の意味で人間化する契機を「内侍のかみ」巻における言語状況に見出すことを試みた。考察の過程で注目したのは、あて宮と仲忠の会話に「高麗」（独楽）という表現が用いられている点である。「高麗（独楽）」の比喻を契機として、あて宮は仲忠と共に言説上の異世界へ入り込んでいく。これにより、

あて宮と仲忠が物語の経験的現実から離脱し、自己を転位させることが可能となる。ここで、この表現があて宮が東宮妃として組織化されている状態から解放され、一人の女性として人間化してゆく契機として機能していることを結論として提示したい。「高麗」が切り拓く異世界において、二人の応酬は互いの立場（臣下・東宮妃）を越えた激しい恋の駆け引きに発展することとなる。最終的に、あて宮は仲忠との恋歌の交流を通じて、恋愛感情が芽生え、一人の女性として、さらに言えば真の意味での人間としての成長を遂げていくのである。

その後、あて宮に芽生えた繊細な恋愛感情は、東宮と結ばれた夫婦関係に対して、負の影響を及ぼしていると思われる。特に、「葦開」巻や「楼の上」巻などにおいて、あて宮が、品性、容姿や才芸の優れた仲忠に好感を抱くことで、東宮に「むつかる」（機嫌を悪くする）という気持ちを抱くようになる様

子が見られる。本来、東宮の寵妃となることは、貴族女性にとって最高の荣誉であり、また、正頼家にとっては政治的な権力の維持に資するものでもある。それゆえ、あて宮は、東宮に対して穏やかな態度を示し、東宮の信頼や寵愛を固めることが重要である。しかし、あて宮は逆に、東宮が臣下の仲忠には及ばないと考えており、東宮に不満の様子を示している。本稿では、そこにあて宮の一人の女性としての私的な感情を読み取った。また、その不満や嫌悪感を東宮妃としての藤壺の、東宮に対するものではなく、一人の女性としてのあて宮の、男性としての魅力に欠けた夫に対するものとして解釈しておきたい。これは、あて宮が、政治的な立場にあるだけでなく、人間的な存在としての複雑な感情や思考を持っていることを示す要素とも言えよう。

## 〔注〕

- 1 室城秀之は、『うつほ物語』の主題と構想について、「琴の秘伝伝承の物語は、俊蔭一族の王権獲得の物語として一方の軸となっており、また、あて宮への求婚をめぐる物語は正頼家の王権獲得の物語として、前半の求婚譚のみならず、後半の立坊争いまで、一貫していまい一方の軸となっている」（「序章 うつほ物語研究の現在の課題」、『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月、16頁）と述べている。また、高橋亨は、「宇津保物語では、竹取物語の話型の複合が、俊蔭系と藤原君系という、二系列の物語として現象している」（「長編物語の構成力—宇津保物語「初秋」の位相」、『物語と絵の遠近法』、ぺりかん社、1991年9月、310頁）としている。
- 2 『うつほ物語』のテキストは新編日本古典文学全集14～16（小学館、1999～2002年）により、巻名、頁数を記した。引用文中の傍線／、枠□は筆者による。以下、同様。
- 3 関根賢司は、あて宮は「かぐや姫の正系、その血筋正しい姪である」（「かぐや姫とその裔

（<特集>平安前期物語）、『日本文学』、第23巻第6号、1974年、20頁）と説く。

- 4 須見明代「『宇津保物語』における俊蔭女」（『東京女子大学 日本文学』、第39号、1973年、29頁）
- 5 つまり、室城秀之は、あて宮が将来の国母としての資質を発揮する（政治的な駆け引きをする）ことを彼女の個性が表出する過程と捉えている（『『うつほ物語』におけるあて宮—「宮仕へ心行く」とは、何をか言ひけむ」<宮中への流離>』、『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月、247頁）。
- 6 大井田晴彦「『うつほ物語』国譲巻の主題と方法—仲忠を軸として」（『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月、165頁）
- 7 湯浅幸代は、実忠の家庭再建や中納言昇進に対するあて宮の配慮に注目し、あて宮の「情愛」を彼女が世の中の物事と人情を理解する能力として解釈している（『『うつほ物語』国譲巻に見る氏族の論理：「かぐや姫」の見定める「心ざし」と『九条右丞相遺誡』の「一心同志」から』（『日本文学』、第66巻第2号、2017年2月、9頁）。

- 8 「ことばの祭り」は、高橋亨の論文（前掲注1に同じ）における表現を参照し、引用したものである。以下、同様。
- 9 『うつほ物語』における会話文の先行研究については、勝亦志織の『『うつほ物語』における音楽性とエクリチュール—「語り手」の存在と「会話文」「絵解』（『平安朝文学における語りと書記（エクリチュール）—歌物語・うつほ物語・枕草子から』、武蔵野書院、2023年3月、130-133頁）で、詳しく紹介されている。
- 10 伊藤禎子は、「会話に表れる言葉は表面上のものとなり、腹の内（心の中）は別にあるという二重構造の会話文が生成されるに至ったのである。いわば、言葉の応酬であった会話が心理劇をも惹起するまでになったのである」（『祝祭物語論』、『『うつほ物語』と転倒させる快楽』、森話社、2011年5月、162頁）としている。
- 11 『源氏物語』のテキストは、新編日本古典文学全集20～25（小学館、1999～2002年）により、巻名、頁数を記した。
- 12 須見明代が1972年12月の物語研究会での発表（題目：「宇津保物語・初秋の巻について」）において、民俗学的視点から祭りの要素を『うつほ物語』に導入して以来、先行研究は「内侍のかみ」巻の非日常性を屢々指摘してきた。例えば、高橋亨（1991、前掲注1に同じ、325頁）は「初秋の巻に表現されている恋愛関係は、非日常的な〈色ごのみ〉の世界であった」と説く。また、大井田晴彦は「物語の世界が非日常的な性格を帯びてきた」（『『うつほ物語』の転換点—「内侍督」の主題と方法』、『国語と国文学』、第76巻第6号、1999年6月、17頁）と述べている。
- 13 『うつほ物語』新編日本古典文学全集の頭注（内侍のかみ・211頁）を参考にしたものである。
- 14 陣野英則は、『源氏物語』に登場する「高麗人」は、「鴻臚館」という迎賓館に滞在する、歴とした公式の使節であったため、国交のなかった新羅や高麗からの使節という可能性は低い。したがって、正式に国交を結んでいた渤海国からの公式使節であると指摘している。同様に、『うつほ物語』における「高麗人」も、渤海国の公式使節と見なしている（『渤海使と平安朝文学—『うつほ物語』の「高麗人」と「おほやけ』』、『国文学：解釈と鑑賞』、第76巻第8号、2011年8月、60-67頁）。
- 15 大井田晴彦（前掲注12に同じ、25頁）において、「『内侍督』の二人のやりとりは、『祭の使』のそれ（秋、七月の夕暮れの出来事）を裏返しにしたものと見ることができる」という観点からの指摘がある。
- 16 根本智治は、「押しかかる」（寄り掛かる）という仲忠の動作に注目し、それは「健康で正常な立ち居振る舞いからの変調を意味しているように思われる。つまり、本来あるべき姿からの逸脱を示している」とし、「長押という境界線で仲忠は恋の言葉を操ることのできる場所を確保した」（『内侍督的世界：前半部の会話の論理』、『講座平安文学論究 第十二輯』、風間書房、1997年9月、145-147頁）と指摘する。
- 17 竹原崇雄は、「こまうど……」の会話を、「催馬楽山城の一節に『我を欲しと言ふ』という表現が続いていることを考慮すれば、催馬楽山城が上手であるということは、仲忠の貴宮に対する恋情を『欲しと言ふ』という一節に暗示させて言ったのではないかとの解釈もできる」（『宇津保物語「内侍のかみ」における物語的世界の構造：稲賀氏のクイズの享受法による解明』、『国語と国文学』、第60巻第4号、1983年、17頁）としている。
- 18 『うつほ物語』新編日本古典文学全集の頭注（内侍のかみ・213頁）を参考にしたものである。
- 19 『うつほ物語』新編日本古典文学全集の頭注（内侍のかみ・213頁）を参考にしたものである。
- 20 前掲注1に同じ、328頁。
- 21 秋山虔「源氏物語の和歌をめぐって」（『王朝の文学空間』、東京大学出版会、1984年、188頁と193頁）
- 22 高橋亨は、「初秋の巻が再生させたことばの祭りというべき表現の力は、祭りの終わったあとも、かたちを変えながら持続していく。蔵開の巻、そして国譲の巻におけるリアリズムの深化として評価されている問題も、これを前提にすることなくしてはとらえられないであろう。」（前掲注1に同じ、328頁）としている。
- 23 坂本信道は、「あて宮からの個人的な愛情」という側面からみれば、仲忠は東宮を凌いでいる（『仲忠・あて宮・女一宮—「うつほ物語」栄華の方法と論理』、『女子大國文』、第113巻、1993年6月、5頁）と指摘する。大井田晴彦は、「（あて宮は）仲忠のような魅力に乏しい春宮を愛することができない。『宮は御心・御才も……誰にかはし劣りたまへる』という言葉も空疎に響くだけである。『ねびもてゆくままに、光をぞ放つべき』という仲忠の様子を眼にし、耳にするにつけても、自分の失ったものの大きさを痛感するばかりである」（『仲忠と藤壺の明暗—「蔵開」の主題と方法』、『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月、150頁）としている。